

重点取組分野	令和 元 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①知識等の定着を図る授業とそれらを活用・応用した授業をバランスよく計画的に進める。 ②主体的に問題に取り組むために、学びあうこと、伝え合うこと、認め合うことができる場面の構築を図る。③横浜の時間の充実のために、地域の材とかかわり合い、理解を深める。	①知識の定着は確実に図られてきているが、活用・応用については引き続き計画的に進める必要がある。学年研で見通しをもたせていく。②子供が主体的に取り組むことができるよう学年で授業の順番を考えたり流れを確認することができた。特別な設定をするのではなく日々の学習の中でペア・グループ学習を取り入れた。③達成できていない面が多く、来年度も引き続き課題をもって取り組んでいく。	B
豊かな心	①子どもの主体的な人権意識を高めるために子ども人権会議の継続を図る。 ②教職員の人権意識を高めるための研修を実施するとともに、人権教育の充実を図る。 ③たてわり活動の充実を図り学級集団だけでなく、異学年同士とのつながりを築く。	・継続して子ども人権会議を開き、あいさつ運動に熱心に取り組んで、その意識を高めることができた。 ・教職員は、支援の必要な子への理解と対応について研修するなど、人権意識を高めることができた。 ・たてわりを生かした集会をするなど、異学年間の交流をもつてきた。学年ごとに役割を設定し、主体的に活動することができる子どもが増えた。	B
健やかな体	①「早寝、早起き、朝ごはん」を推進する。 ②「命の授業」の取り組みにより自らの健康は自らで守り、鍛える意識を高める。 ③基礎体力の向上に向け、体育学習時にラジオ体操を取り入れたり、集会活動を活用したりする。	・「早寝、早起き、朝ごはん」は長期休暇前後や保健の学習を利用して呼びかけることができた。 ・「命の学習」により自らの健康について関心を高めることができた。 ・ラジオ体操の取組は学級により差が出てしまったが、ラジオ体操に関する意識は高まった。	B
特別支援教育	①特別支援が必要な子どもたちへの支援のありかたを全職員が共通理解する。 ②自閉症研修等特別支援が必要な児童への対応について基礎研修を充実させる。 ③ユニバーサルデザインを生かして、授業や教室環境に取り入れる。	・各学年から出された特別支援が必要な児童について、校内支援委員会を通して職員会議で共通理解することができた。 ・夏の職員研修で、自閉症研修を行い、職員が対応について基礎研修の充実が図られた。 ・ユニバーサルデザインの活用ができていた。	B
児童生徒指導	①学校スタンダードをもとに、学習指導、生活指導や生活指導に心がけていく。 ②いじめについて、丁寧な把握による早期発見、対応に努める。 ③校内支援委員会を定例化して、児童の状況を共通理解する。	・第一小スタンダードを活用しながら、学習指導や生活指導に心がけていく。 ・いじめについて、全職員で丁寧に対応し早期発見や対応に努めた。 ・校内支援委員会を月1回(全体会年2回)行うことで、児童の様子を共通理解できた。	B
地域連携	①保育園と、子ども・職員の交流の活性化を図り、接続カリキュラムが円滑に行われるようにする。 ②学校・地域コーディネーターとの連携により、保護者・地域の方のボランティア参加を積極的に取り入れる。③地域の防犯防災について関係機関と連携して計画実施改革に取り組む。	・1年生、5年生が継続して近隣保育園と交流した。また、避難訓練を合同で行った。様々な機会を通じて接続カリキュラムが円滑に行われるようにした。 ・学校・地域コーディネーターとの連携により、保護者ボランティアが環境整備や児童の支援にかかわる機会を作ることができた。地域のボランティアとの連携もできるとよい。	B
いじめへの対応	①いじめ防止対策委員会を実施し、児童の状況把握と未然防止に努める。②「YPアセスメント」や「横浜プログラム」を活用し受容的な学級・集団作りを行う。③アンケートの実施により、子どもの些細な変化を見逃さない体制づくりをするともに、未然防止に向けた取組を進める。	・毎月1回いじめ防止対策委員会を、実施したことで児童の状況把握と未然防止に役立った。 ・横浜プログラムの活用するクラスが増え、受容的な学級作りを目指しての取り組みができた。 ・アンケートから、いじめの未然防止にむけて取り組みが進められた。	A
人材育成・組織運営(働き方改革)	①重点研究の取り組みを通して児童の変容について見と、主体的な取り組みができるような授業改善を行う。 ②ブロック研やメンター研などを通して指導力向上を図る。 ③通常研修として、不祥事防止、体罰防止、いじめ未然防止、児童理解などを行う。	・重点研究の際には、検討会で話し合い、読書会や並行読書等を取り入れることで児童が主体的に学習を進めることができるようにした。 ・メンター研修の数を多くとることができなかつたので、年に3回ほどできるようにしていきたい。 ・いじめを未然に防止するために職員間で児童の様子を共有することができた。	B
ブロック内評価後の気付き	・横浜市学力学習状況調査の結果を踏まえ、港南台の「まちの子ども」を連携の中で育てていくための情報交換を進めた。 ・小中の職員が互いに授業見学を行ったり、合同研修会を行ったりすることで、9年間を見通した継続性のある学習指導の実践についての研究を進めた。 ・生活面でのきめ細やかな連携の充実に向けて、小学校間の情報交換もはかるようにした。		
学校関係者評価	・「いじめ防止基本方針」に関連して年間を通して人権の取組をしたり、先生に相談できたりするのがよい。いじめの問題は家庭のしつけが大切である。PTAと連携していじめがない学校になるようにしてほしい。 ・地域が子どもを育てる環境をつくりたい。地域でも子どもたちに声をかけ指導をしていく。地域全体で、挨拶の大切さを指導していきたい。		
中期取組目標振り返り	○全教職員で共通理解を図り、見直しをもって「わかる」「できる」授業へ取り組み、児童の知識・技能の定着が図られた。活用・応用力の育成については、引き続き課題として取り組んでいく必要がある。 ○全教職員の人権意識を高め、児童の小さな変化を見逃さないようにし、定期的に対策委員会や児童理解研修を開催し、問題の早期発見・早期解決につなげた。また、児童が安心して通える環境づくりを行った。 ○学校だより・学校HPを充実させ、学校経営方針や教育活動をわかりやすく発信し、保護者のニーズや地域の意見を教育活動に反映させることで、学校・家庭・地域の相互の信頼関係が構築できた。		

重点取組分野	令和 2 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①知識等の定着を図る授業とそれらを活用・応用した授業をバランスよく計画的に進める。 ②主体的に問題に取り組むために、学びあうこと、伝え合うこと、認め合うことができる場面の構築を図る。 ③横浜の時間の充実のために、地域の材とかかわり合い、理解を深める。	①新型コロナウイルス感染症に関する休校期間があったが、家庭の協力、担任の努力、工夫により知識の定着は確実に図られてきている。活用・応用については引き続き計画的に進めていく。②主体的に問題に取り組むために、学びあうこと、伝え合うこと、認め合うことができる場面の構築を図る。③横浜の時間の充実のために、地域の材とかかわり合い、理解を深める。	B
豊かな心	①子ども人権会議を継続して開き、子どもの人権意識を層高めていく。決定事項や全校で取り組むたいことについて周知し、より主体的に取り組めるようにする。 ②教職員は、支援の必要な子への理解と対応について研修するなど、人権意識を高めることができた。 ③異学年同士の交流を広げ、相手を思いやる気持ちを育てる。	・人権会議は中止となったが、人権委員会が中心となり、あいさつ運動や階段一言キャンペーン、笑顔の木に取り組むこと、全校の意識を高めることができた。 ・教職員は、支援の必要な子への理解と対応について研修するなど、人権意識を高めることができた。 ・感染症対策等で、異学年間の交流は減少したが、異学年同士の交流を広げ、相手を思いやる気持ちを育てることができた。	B
健やかな体	①「早寝、早起き、朝ごはん」のよさを児童や保護者に伝え、推進していく。 ②「命の授業」の取組により自らの健康は自らで守り、鍛える意識を高める。 ③基礎体力の向上を図るため、体育学習時と休み時間等を活用し、リズム縄跳びを全校で取り組む。	①コロナ禍における感染防止対策を中心に指導してきたため、「早寝、早起き、朝ごはん」よりも「手洗い・うがい・消毒・換気」の方が児童には定着した。 ②「命の授業」に関しては、養護教諭を中心に学年ごとに内容を決め、実施した。振り返りから、3年生の内容のみ、適さない、ということが分り、内容を改めて吟味した。 ③リズム縄跳びは実施できなかったが、休校中を利用し、短縄には多くの児童が取り組んだ。	B
特別支援教育	①全職員で共通理解を図りながら、特別支援が必要な子供の支援をしていく。 ②自閉症研修等特別支援が必要な児童への対応について基礎研修を充実させる。 ③授業や教室環境に、ユニバーサルデザインを取り入れる。	・特別支援が必要な児童の共通理解をはかり、情報を共有して支援していくことができた。 ・人権教育と連携して児童理解を深める研修を行うことができた。 ・ユニバーサルデザインの活用に取り組んだ。	B
児童生徒指導	①学校スタンダードを基にして、学習指導や生活指導や生活指導に心がけていく。 ②いじめについて、丁寧な把握を行い早期発見、対応に努める。 ③定例化している校内支援委員会をより活性化させ、児童の状態を共通理解していく。	・第一小スタンダードを活用しながら、学習指導や生活指導に心がけていく。 ・いじめについて、全職員で丁寧に対応し早期発見や対応に努めた。 ・校内支援委員会を月1回行うことで、児童の様子を共通理解できた。	B
地域連携	①保育園と子ども・職員の交流の活性化を図り、接続カリキュラムが円滑に行われるようにする。 ②学校・地域コーディネーターとの連携により、保護者・地域のボランティア参加を積極的に取り入れる。 ③地域の防犯防災について関係機関と連携して計画実施する。	・1年生、5年生が感染症の影響を考慮し工夫して近隣保育園と交流した。様々な機会を通じて接続カリキュラムが円滑に行われるようにした。 ・学校・地域コーディネーターとの連携により、保護者ボランティアが環境整備や児童の支援にかかわる機会を作ることができた。地域のボランティアとの連携もできるとよい。	B
いじめへの対応	①月1回のいじめ対策委員会をより充実させることで、児童の状況把握といじめの未然防止に努める。 ②「YPアセスメント」からつかんだ傾向を横浜プログラムを生かしながら、需要的な学級・集団作りを行う。 ③アンケートの実施により子どもの些細な変化を捉え、未然防止に努める。	・いじめ対策委員会を通して、児童の情報交流を活発に行い、いじめの未然防止・状況把握・迅速な対応に努めた。 ②「YPアセスメント」からつかんだ傾向をもとに児童理解・クラス運営に役立てた。 ③アンケートから、いじめの未然防止に向けて取り組みが進められた。	B
人材育成・組織運営(働き方改革)	①重点研究の取り組みの中で、対話を楽しみながら活動できる授業に取り組んだ。 ②メンター研などを通して、経験年数の浅い先生を中心に教員の指導力向上を図る。効率のよい授業準備についても考えていく。 ③通常研修として、不祥事防止、体罰防止、いじめ未然防止、児童理解などを行う。	・推進委員会が中心になって、児童が主体的に活動できる授業に取り組んだ。 ・メンター研修を通して、児童理解の場を共有することができた。 ・校内支援委員会や職員会議等の場を通していじめの未然防止や児童理解を行うことができた。	B
ブロック内評価後の気付き	・小学校における観点での学習評価について情報を共有した。評価結果については、学校や学年ごとに差異はあるものの、改めて客観視することができた。 ・ブロック内で「あゆみ・連絡票」の様式を検討し、要録に沿った統一した結果、教職員の負担が大きく軽減された。 ・中学校での「総合的な学習の時間」の実践を小学校と共有したことで、9年間を通して「地域」について学習していく見直しを、小中学校間でもつことができた。		
学校関係者評価	・感染症対策で新しい生活様式に取り組んでいく中でも、学びの歩みを止めず、対策を十分に講じて最大限の教育活動に取り組んでいた。 ・今年度は休校のために授業日数、授業時数が不足する中で、基礎・基本の定着や豊かな心の育成に向け、着実に取り組んでいた。 ・ICT活用の推進が進んだ。学校行事も内容の精選・変革に取り組んだ。		
中期取組目標振り返り	○学校だより・学校HPを充実させ、学校経営方針や教育活動をわかりやすく発信し、保護者のニーズや地域の意見を教育活動に反映させた。細やかで丁寧なメール配信等の情報発信に努め、学校・家庭・地域の相互の信頼関係構築につなげている。 ○子どもも小さなSOS発信を見逃さず、問題に対するチーム・組織で対応するよう心掛けてきた。問題・課題を小さな芽のうちに解決することができている。 ○新しい生活様式、制限のある教育活動の中で、できることを模索し実行してきた。GIGAスクール構		

重点取組分野	令和 3 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
生きてはたらく知	①知識等の定着を図る授業とそれらを活用・応用した授業をバランスよく計画的に進める。 ②主体的に問題に取り組むために、学びあうこと、伝え合うこと、認め合うことができる場面の構築を図る。 ③横浜の時間の充実のために、地域の材とかかわり合い、理解を深める。	①繰り返し指導をすることで、知識の定着は確実に図られてきている。活用・応用については学年でよく検討し、見直しをもたせていくようにした。 ②子供が主体的に取り組むことができるよう流れを確認することができた。特別な設定をするのではなく日々の学習の中でペア・グループ学習を取り入れた。また、GIGA端末が導入され、学年に応じて、考えをまとめたり発表したりすることができた。 ③校内での取り組みを共有し発信した。定期的なものもあり、地域の材とかかわり合いは進んだ。	B
豊かな心	①子ども人権会議を継続して開き、子どもの人権意識を層高めていく。決定事項や全校で取り組むたいことについて周知し、より主体的に取り組めるようにする。 ②教職員は、支援の必要な子への理解と対応について研修するなど、人権意識を高めることができた。 ③感染症対策が必要なことを踏まえながら、できる限り異学年同士の交流を広げ、相手を思いやる気持ちを育てる。	・一中ブロック横浜こども会議を受けて、「一人一人を認め合い、気持ちのよい声かけ」ができるよう呼びかけ全校で取り組むことで、人権意識を高めた。 ・教職員は、誰もが安心して学べるよう、ユニバーサルデザインなどについて研修するなど、人権意識を高めることができた。 ・感染症対策を講じたから、ベア学年での異学年交流を行った。限られた回数だったが、交流をベア学年にしたことで、より相手意識が高まった。	B
健やかな体	①「感染症予防」を推進するとともに、自らの健康は自らで守り、生活していく習慣を身につけさせます。 ②「命の授業」の取組のより効果的な時期や内容の吟味を行う。 ③基礎体力の向上を図るため、体育学習時と休み時間等を活用し、リズム縄跳びを全校で取り組む。	①校内の感染状況や社会全体の傾向について、その都度、打ち合わせ等で情報共有があり、児童にも意識して周知徹底を図ることができた。 ②昨年度の反省を受け、内容は改善され6学年通して行うことができるようになった。実施の時期については、コロナの感染状況により実施できない学年もあるため、決められた時期にこだわることなく実施していく必要があった。 ③リズム縄跳びを全校で実施することができ、体育の時間等にも活用することができた。さらに一つひとつの技の技能向上を目指していくべき。	B
特別支援教育	①職員間だけでなく関係機関とも連携して、特別支援が必要な児童に対応していく。 ②センター的機能を活用しながら、特別支援が必要な児童の理解を深める。 ③学校経営計画の反省をもとに、配慮のいる児童を理解するための研修を活用していく。	・校内支援委員会・区役所や近隣校とのケース会議等を通して情報共有を図り支援していく体制をとり、対応をした。 ・センター的機能を活用して、ユニバーサルデザインをテーマにした研修を行うことができた。 ・学校カウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携して、配慮のいる児童の理解を深めた。	B
児童生徒指導	①学校生活を送りやすいようスタンダードを活用して生活指導に役立てる。 ②いじめについて、丁寧な把握を行い早期発見、丁寧な対応に努める。 ③校内支援委員会を通して児童理解を深めていく。	・スタンダードを職員間で共通理解をはかり、児童指導に役立てた。 ・いじめについて早期発見に努め、学年・校内支援委員会等を活用して対応をした。 ・月1回の校内支援委員会を通して、児童理解や対応を考えた。	B
地域連携	①保育園と、子ども・職員の交流の活性化を図り、接続カリキュラムが円滑に行われるようにする。 ②学校・地域コーディネーターとの連携により、保護者・地域の方のボランティア参加を積極的に取り入れる。③地域の防犯防災について関係機関と連携して計画実施改革に取り組む。	・感染症予防のため、保育園との交流、中学校との交流は実施できなかった。来年度は工夫して実施する方法を模索したい。 ・学校・地域コーディネーターとの連携により、保護者ボランティアが環境整備や児童の支援にかかわる機会を作ることができた。地域のボランティアとの連携もできるとよい。	B
いじめへの対応	①いじめ対策委員会を通していじめの把握・対応を協議し、未然防止に努める。 ②「YPアセスメント」からつかんだ傾向を把握し、横浜プログラムを通して集団形成に役立てる。 ③アンケートや面談などを通して、日々の児童心理の把握に努める。	・いじめ対策委員会を通して、いじめの把握・対応・経過等を共通理解し、未然防止にも努めた。 ・YPアセスメントを通してつかんだ傾向をもとに児童理解や学級運営に役立てた。 ・個人面談やいじめ解決のためのアンケートをもとにいじめへの対策を考えることができた。	A
人材育成・組織運営(働き方改革)	①重点研究を通して、授業づくりの共同作業の場を作り職員同士の交流を深める。 ②メンター研などを通して、経験の浅い職員の悩みを共有する場を作っていく。 ③通常研修として、不祥事防止、体罰防止、いじめの未然防止、児童理解を行う。	・重点研究推進委員会が中心となって、国語の授業の研鑽に取り組むより分りやすい授業の研究を深めた。 ・メンター研修を通して、初任者の話し合いの場を設けた。 ・管理職と連携をして、不祥事防止・体罰防止・いじめの未然防止の研修を行うことができた。	B
ブロック内評価後の気付き	・国語の授業について、授業から所属校へ文章提案をし、感想や意見を交換した。連続性のある学習指導のために大切な視点について、理解を深める機会となった。 ・GIGA端末の利用場面やルール作りについて話し合った。各校の取組を情報共有することにより、小学校から中学校へのつながりや小学校間の共通点や相違点が明らかになり、今後のブロックでの取り組みのヒントを得ることができた。		
学校関係者評価	・感染症対策で新しい生活様式に取り組んでいく中でも、学びの歩みを止めず、対策を十分に講じて最大限の教育活動に取り組んでいた。 ・ICT活用の推進が進んだ。学校行事も内容の精選・変革に取り組んだ。		
中期取組目標振り返り	○学校ホームページ・メール配信によるきめ細やかな発信をしてきた。学校経営方針や学校の現況を適切に周知できた。このことは学校評価アンケートにおいても高い評価を得ている。 ○GIGAスクール構想の実現・ICT活用の推進に大きな成果を上げた。一人一人端末を活用した授業づくりをすべての学級で実施できた。学校と保護者間の連絡方法もデジタル化を進めた。 ○感染症対策を徹底し、安全で安心な学校生活を実現してきた。可能な範囲で工夫を凝らし、新しい生活様式の実現に取り組んだ。		